

教師 新美南吉論

都 築 久 義

はじめに

新美南吉が勤務した安城高等女学校は、戦後の学制改革で共学の愛知県立安城高等学校となったが、わたしはたまたまこの学校を卒業し、後に母校の教壇に立った。わたしが高校時代を過ごしたのは、昭和三十年代の初めで、講堂など女学校の建物が少し残っていたものの、新美南吉のことが話題になった記憶はない。しかしそれから十年後、教師として母校に帰って来た時は、新美南吉は有名人だった。

彼の童話集が相次いで出版され、『新美南吉全集』全八巻（牧書店 昭40）が公判されるほど、その名声と評判は高まっていた。彼が童話だけでなく小説、詩、短歌、俳句などあらゆる文学ジャンルに筆を染めていたことも知った。中学時代からの日記、見聞録、ノートも公開され、ここにはほぼ新美南吉の生涯の業績が明らかにになった。ところが、南吉の年譜はこの全集を含めて、これまで編まれたものを調べると、安城高等女学校時代のことが空白に近かった。おそらく年譜の編者は、南吉の日記をもとにして作製したのだろうが、日記には年譜に記すべき事項はあまり書かれていない。そこでわた

しは母校に勤務したのを機に、この年譜の空白を埋めようと思ひ、安城高等女学校時代の学校記録や刊行物などを探してみた。

幸いこの学校は、空襲や戦火に遭遇しなかつたため、古い学校史やアルバム、行事の記録や刊行物が、宿直室の押入れに未整理のまま木箱に入つて残つていた。この箱の中から『安城高女学報』の綴りが出て来た。この新聞綴りを発見した時の興奮は今でもはっきり覚えてゐる。

『安城高女学報』（以下『学報』）は、昭和八年五月に創刊され、年三回、学期毎に発行された生徒の家庭向けタブロイド版の新聞である。十六年から年二回になり、頁数も八頁から半減し、十七年十一月に終刊したが、毎号、行事予定や行事報告、家事・農業実習などの進捗予定表も載つてゐる。毎年、学年初めの『学報』には「職員諸務分担一覧表」が掲載され、教員の担当授業科目、校務分掌が記載されている。これを見れば教員の様子が一目瞭然であり、南吉の在職中の動向がはっきりする。

学校記録の入つていた木箱には、『学報』の他にも同窓会報や南吉が同僚と旅行した時の写真集などもあり、これらの資料をもとにわたしは年譜を作り、『新美南吉ノート 安城高女時代』（昭和43・1 私家版）をまとめ、『日本児童文学』（昭和43・10）に、南吉の戦争観を中心に論じた「戦時下の新美南吉」を発表した。

率直にいつて新美南吉の童話については、かつて今も格別な興味も関心も持つてゐない。牧書店版八巻全集が刊行された後、『校定新美南吉全集』全十一巻と別巻二巻（大日本図書 昭和55）が出た時には、過大評価ぶりに驚いた。

しかし、人間・新美南吉、なかならず教師としての南吉には、かつて今も強い関心と興味がある。この小論では、安城高等女学校の勤務時代に焦点をあて、一、教育者 新美正八、二、文学者 新美南吉、三、戦時下の教師と文学者という観点で、新美南吉こと新美正八を論じてみたいと思う、なお本稿の引用文は前述の大日本図書版の全集を使用し、同全集で見聞録、ノートとして収録されている文章も「日記」として扱つた。

一、教育者 新美正八

安城高等女学校は、大正十年に愛知県碧海郡安城町が創立し、三年後に愛知県に移管した修業年限四年の女学校である。学則による生徒定員は四百名、各学年百名であったが、年度によって増減があったものの、入学者の定員不足は長く続いた。特に昭和十年前後の数年間は五十名をそこそこ激減し、昭和九年には安城町で女学校の廃校問題が議論されたほどだ。

しかし、南吉が赴任した次の昭和十四年から入学者が増え、へ本年の第一学年入学者は百四名、これを星組花組に分けてみますと、同年二期号の『学報』は伝えている。かような小さな女学校であったから、教職員の数も十五名たらずという少なさで、一人の教員が複数の授業科目を担当するのが普通だった。家事や裁縫などの授業科目の関係で、女子教員が多かったのも女学校らしい、独特の雰囲気があったようだ。

もっとも、女学校でありながら農業実習が正科の授業科目になっていたのは、当地が日本のデンマークと呼ばれ、農業先進地域であったからであろう。校地に隣接して二十四アールの農耕地があり、豚舎や鶏舎まで持って、全学年に農業実習を課していた女学校だった。校訓は「一、教養ある婦人たれ、二、よく働く婦人たれ」の二ヶ条だが、へよく働く婦人たれ」の校訓に、この学校と地域の事情がうかがえる。

新美南吉こと新美正八がこの田舎の小さな女学校に赴任したのは、昭和十三年四月である。彼は二年前、東京外国語学校英語部文科を卒業し、東京商工会議所内の協会事務所に勤めたが、半年後に咯血して帰郷を余儀なくされた。その後、体調の回復を待って、小学校の代用教員や飼料会社に勤務しながら、半田中学校時代の恩師に依頼して中等教員の就職口を探していた。その念願がやっとかなっての赴任である。

新美正八は赴任すると早々に、入学したばかりの一年生五十余名の担任を命ぜられ、卒業まで受け持った。校務は図書

係、校友会は学芸部顧問を任命され、『学報』も十三年度三学期号から編集するようになった。一年目の授業は英語、国語、農業実習。ただし、英語は全学年、国語と、農業実習は一・二年だった。英語は二年目以降も全学年の担当であったが、国語と農業実習は担任クラスが中心になった。

彼は外国語学校英語部出身で、教員免許も英語でありながら、英語の授業にあまり興味も自信もなかったようだ。女学校の先生になって一年もたっているのに、日記にこんなことを書いている。

この頃英語の授業にもや、興が持ててきた。自信も出来てきた。今日一年の時計の課を終わる。

(十四年二月四日)

これではいささか心もとない英語教師だ。しかし、国語や作文の授業は自信もあれば力も入れていたようだ。特に作文については、

一年間見てやつて来たのに、自分としては一ばん情熱をこめてやつて来たのに、最初に書かした作文とどれだけ違つて来てゐるだらうと思ふとうた、情けなかつた。

(十四年一月十六日)

と書いている。作文だけでなく、詩も作らせるようになった。

作文を二時間やることになつてしまつたので(略)、二時間目は校庭に出して詩を作らした。(略)早速書けた詩を見

ると感覚的にすぐれた詩が多いので張合が出た。

(十四年一月十一日)

この生徒の様子を見てへ一月毎に自由詩のパンフレットを作らうと決心(一月三十日)して、生徒の作品が集まると、自ら三十篇撰んで原紙を切りはじめたのである。こうしてできあがったガリ版詩集第一号が『雪とひばり』だ。わら半紙四折(B5版)、十枚二十頁とささやかながら、自分も自作の詩を寄せた。

引き続き三月に「縁側の針」、四月に「沈丁花と卵」、五月に「麦笛」、六月に「五月雨の土蔵」と、予定通りに毎月一冊ずつ発行したが、九月の「星祭り」でついに終刊した。「終刊の辞」で「詩が続かなくて止めるのではない。紙が足りないから止めるのです。」と、述べている通り、戦時下の紙不足で、もはや続刊できなくなったのだ。

クラス詩集の発行が出来なくなると、彼はまた新たな計画を立てる。

計画。少年少女の読み物を月に若干ずつ買ふ。それを二年生に貸して読ませる(略)先づフローベルの「三つの物語」「支那寓話集」、「ワイルド童話集」を買ふ。

(十五年一月二十五日)

彼はこうして積極的に生徒に接し、生徒の中に入って行ったが、こうした教育の姿勢と立場を次のように述べている。

僕の教育は芸術家的な教育だ。僕の日記は芸術家的な日記だ。僕は二年教育にたづさわつて来たがまだ教育者のやうに教へ、教育者のやうに物を見る事が出来ない。僕はしんからの芸術家的だ。その質は兎も角として。

(十五年一月十三日)

彼がどのような教育をイメージして、〈僕の教育は芸術家的教育だ〉と想っていたかはともかく、文学教育に情熱を傾けていたことと、専門の英語の授業より、得意な国語や作文の授業の方に力を入れ、熱心であったことは事実だ。

生徒詩集を出したのは、文学教育に情熱を傾けた所産であり、その熱意はたしかに際だっている。だが、この詩集に載っているのはクラス全員ではない。第一号こそクラスの半数に近い二十余名の名前が出ているものの、二号以下は頁数が半減したこともあって、載っているのは常連の十名ほどだ。つまりこの詩集は、クラスの中の数少ない文学少女だけのものだったともいえる。それゆえ彼女たちにとっては、新美正八は、尊敬する大好きな先生だったはずだ。

一方、国語が不得意な生徒や、作文や詩が苦手な生徒にしてみれば、作文や詩ばかり書かせる嫌な先生だったにちがいない。田舎の女学校には珍しい、東京外国語学校出身の若い英語教師に、熱心な英語の授業を求めていた生徒たちは、きつと失望したであろう。文学好きな少女にばかり目をかけ、彼の原稿の清書までさせたりしてエコひきをしていた正八に、不快な思いを抱いていた生徒も少なからう。

いずれにしても、彼は生徒を平等に扱わなかったし、皆んなから好かれていたのではない。しかし、誰からも好かれる先生が教師として立派かどうかは別なことだ。個性や独特の教育観を持っている教師は、嫌らわれもするが、生徒に強烈なインパクトも与える。新美正八が強烈なインパクトを与えたことはたしかだ。

二、文学者 新美南吉

新美南吉が安城高等女学校への就職内定の知らせを受けたのは、昭和十三年三月六日である。その喜びと今後の決意を、

次のように日記に記している。

佐治先生が遠藤先生の宅に参られ、僕を呼んで今日やつと縣の方の話がついたと言われた。これで遂に話が進まかったのである。下手な小説はもう書けなくなつた。一ついい事があれば一つ悪いことがあるものだ。が、むろん後の方の不都合は何でもないことだ。(略) これでもう体もあまり無茶は出来ぬ。

ところが、〈下手な小説はもう書けなくなつた〉という決意は、はやくも一年後には旧友からの手紙で揺らぎ始める。

異さんと江口から手紙が来ていた。(略) 江口のはハルピン日日新聞の文芸部にはいつたから、原稿を遅れといふのであつた。コントでも童話でも詩でもなんでもよいといふのであつた。

(十四年四月二十三日)

〈江口〉とは東京時代の文学仲間で、明治大学出身の江口榛一だ。ハルピン日日新聞は旧満州で発行されていた新聞である。旧友からとはいえ、一般紙からの原稿依頼に気分をよくし、原稿をへすぐに江口のところへ送つた。(五月七日) という。

最初に送つた原稿は、「最後の胡弓弾き」だが、それから一年ばかりの間に、「花を埋める」や「久助君の話」といった童話や小説六編の他、いくつかの詩も寄稿した。

同紙はいわゆる外地の新聞であつたから、内地の人の目にふれることは少なかったが、久びさの創作活動が、文学熱に火をつけ、最初の決意も覚悟も忘れさせた。赴任して三年目になると、異聖歌にこんな手紙を出す。

今日から授業がはじまりました。授業と一緒に創作活動もはじまらねばならない。

(十五年四月六日)

異聖歌は昭和六年九月、童謡雑誌『チチノキ』加入を通じて懇意になり、上京して交友を深めた文学仲間の先輩だ。

その異聖歌が『新児童文化』の創刊を企画するとさっそく南吉に、原稿を依頼してきた。『新児童文化』第一冊(創刊号)は十二月に発行され、南吉の「川」は、小川未明や坪田譲治の作品と並んで掲載されたうえ、新聞広告に新美南吉の名前が載るといふ、初めての体験もした。

巽の編集した『新児童文化』の広告が出てゐた。僕の名も見える。うれしいのである。いや亢奮するのはよせ。『死』の隣の部屋にゐることを忘れるな。

(十五年十二月十八日)

実はうれしいことが同じ時にもう一つあった。江口榛一の斡旋で、「銭」が『婦女界』の十二月号に載ったのである。ついに南吉の作品は全国誌に載り、新聞広告にまで名前がでるようになった。

婦女界に「銭」が発表されたことと、新児童文化に「川」がのること、それだけの「成功」にこの頃の僕は酔つてゐる。杯に二三杯のむともう酒に酔つてしまふが、成功に対してもこんなに弱いのか、何と不甲斐ない次第である。

(十五年十二月二十六日)

南吉の喜びようが目に見え、うれしいことはそれだけではなかった。今度は学習社から処女出版の話があった。その経緯は定かでないが、十六年一月五日の日記に、〈昨夜から「良寛さん」を書き出した」とあるから、正月から書き始めたようだ。〈皇国民錬成に必要な一大文化文庫〉と銘打った学習社文庫の一卷として『良寛物語 手鞠と鉢の子』が世に出たのは、十六年十月一日のことだった。

『良寛物語 手鞠と鉢の子』に続いて、童話集『おちいさんのランプ』が出版されたのは、一年後の十七年十月十日である。書き下ろし三編を含む、七編を収録した最初の童話集だ。発行元は有光社。先述の『新児童文化』も同社から刊行されており、巽聖歌が親しくしていた出版社である。南吉は〈この本が出るについては、はじめに私の先輩の巽聖歌さんが童話集を一冊まとめるやうにと私にすゝめ下さつて、有光社とも話をつけて下さいました〉と、「あとがき」で書いている。本の大きさはB6版のハードカバーで普通だが、装幀と挿画が棟方志功というのが異色だ。独特のデザインが光彩を放ち、戦時下の童話集とは思えぬ雰囲気を漂わせている。

結局『おちいさんのランプ』が生前の最後の本となったが、本の印税が入ると南吉は用務員に鶏飯を作ってもらい、職員全員に振舞つたという。それは得意満面で自慢したかったのか、あるいは職員への別れのあいさつと感謝のつもりだったか。前者ならイヤ味だが、後者ならイキなことだ。いずれにしてもまもなくして死の床につき、最期の力をふりしぼつて、巽聖歌に手紙を送つた。死の一カ月前、十八年二月二十日のことである。

書留で、新しいのも古いのも、童話でないのも、ともかく手許にあるものを全部送りました。いいのだけ拾つて一冊でささうでしたら、作つて下さい。

この最期の願ひは『牛をつないだ椿の木』（大和書店 昭和18・10）としてかなえられた。

同じ時に与田準一の世話で『花の木村と盗人たち』（昭和18・9 帝国教育会出版部）も公刊された。こちらは『赤い鳥』掲載作品が中心である。この二冊は南吉が手にすることはできなかったが、ここには文字通り命を削って書き下ろした作品も数多く収録され、南吉のかくことへの執念がにじみ出ている。

それにしても、彼は、かつて〈大衆文学か純文学か——こいつが問題だ〉と言ひ、△二者何れを選ぶべきか〉（十二年十月十六日）と迷ったことはあつても、児童文学を目指したことはなかった。〈余の理想は、希望は大芸術家〉（四年一月二十五日）であつたはずで、決して童話作家にならうとは思つていなかった。にもかかわらず、生前の彼がささやかな「成功」に酔ひ、文学的名声を得ることができたのは児童文学であり童話作家としてであつたのは、皮肉であらうか。

実は前引の大衆文学か純文学か △二者何れを選ぶべきか〉と書いた後、〈何れに対する自信はないのである〉と素直に告白している。たしかに南吉は、大衆文学や純文学を書くには、あまりにも生活体験も思想体験も貧弱だ。文学仲間も、中学時代の『赤い鳥』の投稿で知った連中とその周辺だけだつた。田舎の女学校の教師の中に「文学」を語れる同僚もいなかった。とすれば、児童文学であれ、童話作家であれ、文学者として名を残したことは事実だから、少年時代の夢は達成したといえよう。

三、戦時下の教師と文学者

新美南吉が安城高等女学校に赴任した昭和十三年四月といえば、前年の七月に勃発した日中戦争のさなかであつた。政府は国家総動員法を公布し、本格的な戦時体制を敷き、しだいに強化していた。新聞は連日、中国大陸の戦況を大きく報道し、雑誌も毎月、戦争特集を組み、文芸雑誌までも文学者の従軍記や現地報告を満載し、世相は「戦争」が日常化し、時代は「非常時」と呼ばれた。

むろん安城高等女学校でも、銃後の日、事変一周年、南京陥落一周年などの折々に、校長が訓話をしたり、現地報告の講演会を開いて、戦争気運を盛上げた。生徒たちは神社の清掃、公共施設への勤労奉仕をさせられ兵士への慰問文、慰問袋の作製が課せられ、出征兵士の家族の慰問、陸軍病院の傷病兵士の見舞いなどにも行かされた。戦時下の様相は女学校にも色濃く漂ってきたのである。

やがて日中戦争が泥沼化してくると、校内に「積極的な銃後の活動団体」(『学報』昭16・10)として学校報国隊が結成されるに及んで、もはや学校も戦争一色になり、太平洋戦争下では、男子学生は学徒出陣で戦地に向かい、女学生は勤労学徒として軍需工場に動員された。ちなみに安城高等女学校で学徒動員が始まったのは、昭和十八年十月からで、十九年一月には女子挺身隊が結成された。

女子学生の勤労動員が始まった十八年十月には、南吉はすでにこの世にいなかったが、先述の勤労奉仕や病院慰問には引率して、真面目に教師の務めを果たしている。しかし、当時の日記を見ても、戦争や戦争体制への批判はもとより、時局や時流については、あまり書いていない。ひとつだけ目を引いたのは、青年学校生徒に向け、講堂で行われた軍人の時局講演会に対する手厳しい感想だ。

この頃はやりの何でもかんでも日本は有り難い国、よい国、なんでもかんでも西洋は個人主義の嫌らしい国といふ千べん一律の話をするくそ面白くない会の一つだ。(略)みんな日本のよい国であることを納得し、支那はやつつけられてゐること、米国も英国もお恐るゝに足りないことを納得し、ついに会は終をつげたのだ。現代日本の風景、何といふ暗い、何といふ非文化的な。

(十五年二月十五日)

東京外国語学校出身で西洋を勉強してきた彼にしてみれば、へなんでもかんでも西洋は個人主義の嫌らしい国」と非難されては、くそ面白くなかったのも当然だ。さすがに英語教師の面目が躍如としている。ところがそれからまもなく、病院慰問に引率し、患者の中に女生徒をひやかす者を見た時、南吉の心況が一変してしまったのには、びっくりした。

彼等は野卑であつた。中学校では落第したやうな連中がかうである。新聞や雑誌の講演会が伝へる、あの勇敢な、お国の為に生命を賭けて戦つてくれる兵士達と、この人達を同人であるとはどうしても思はれなかつた。政府が最近になつて、全体主義、滅法奉公、忠君愛国といふことを、手を拍ち口を酸くして唱へはじめた理由がよくわかつた。僕も学校で日本のよさを説き、お国のために死ぬことの尊さを強調せねばならぬ。

(十五年十二月八日)

奇しくもこれは太平洋戦争の開戦一年前の日記だ。彼がこの後、どれほどへ学校で日本のよさを説き、お国のために死ぬことの尊さを強調したかは知らない。しかし、この一文だけでも、彼がいかに時の政府の方針に忠実な教師であつたかは明白である。

それから一年後、昭和十六年十二月八日、日本は米英に宣戦布告し、太平洋戦争の開戦となつたのは周知の通りだ。

いよいよはじまつたかと思つた。何故か体ががくがく慄へた。ばんざあいと大声で叫びながら駆け出したいやうな衝動を受けた。(略)生徒たちは喜びの声をあげた。何しろ一般にわくわくしてゐた。うれしげな多少はうわついた気分が流れてゐた。ラジオは終日ニュースの間に軍歌を奏でつづけた。まるでお祭り気分ではいつていつた。

(十六年十二月十二日)

ここにも時局に従順だった南吉が彷彿としているが、おそらくこれが、当時の多くの日本人の正直な感慨だった。緒戦の日本の勝利に人びとは歓喜し、毎日の戦況の報道に、誰もが関心を持って見守っていたのである。アジアから西洋の植民地を開放し、大東亜共栄圏を作るというスローガンは、わかりやすかったし、納得しやすかった。

南吉も、対米英戦にひどく興味を持つてゐて、夕飯がすむと火鉢のそばで綿密に朝刊夕刊を讀（昭16・12・24）み、人並みに時局や戦況に関心を示していたのはいうまでもない。

だが、彼がいちばん気がかりだったのは自分の健康のことだった。すでに十六年から、体調が少しずつ悪くなり、しばしば学校も休むようになっていた。日記（昭和16・7・3）にも「死」という言葉が見え始め、年の暮、十二月二十三日、小便の異常に気づくと、腎臓病の悪化を思い、（すぐ死を觀念した）と日記に書いている。そして年明けの十七年一月十日、小便に出血を見て、（死を見つめる）ようになった。思えば昭和十六年十二月八日、太平洋戦争の開戦によって、「大日本帝国」の破滅が始まったが、偶然にも時を同じくして、新美南吉の肉体の崩壊も進行して行ったのである。血尿を見た後の日記に、彼はこう書いている。

朝めがさめるとすぐ病氣のことが頭に來た。しかし恐怖感はなかつた。「死」にも馴れることが出来るものだなと思つた。ちやうど、貧乏や失恋に馴れることが出来るやうに。

昨日から新しい生活がはじまつたのである。腎臓結核（つまり死）との新婚生活が。今日はその第二日目といふわけだ。新生活にともなふ興奮が今もつづいてゐる。

（十七年一月十二日）

太平洋戦争の状況は、昭和十七年の初めには、日本軍はマニラ、シンガポール、ジャワ、ビルマなど、東南アジアの各

地域を占領して破竹の勢いを見せていた。が、六月のミッドウェー海戦の敗戦で戦局は転機を迎え、敗退へ向かっていった。この間、国内では大政翼賛会が結成され、文学界にも日本文学報国会が生まれ、総力戦体制となつて行つたが、南吉の日記では、戦争のことも戦時体制のことも関心外であつた。

唯一ふれているのは空襲のことだ。米軍の日本本土への空襲が始まつたのは、十七年四月十八日。全国各地の空襲の状況は新聞でも報道され、名古屋にも焼夷弾が落とされた。翌十九日には当地でも空襲警報が発令されたがちょうどその頃、前章で述べた『おちいさんのランプ』の出版の話が進んでいった。折しも原稿を東京へ送つた矢先だつた。その日の日記の一文が、当時の南吉の心境を端的に語り、印象的だ。

空襲さわぎで出版がおちちゃんにならねばよいがと思つた。

(十七年四月十九日)

自分の生命が今や終末に近づいていたので、戦争の動向も、日本の行く末も関心がなかつた。他人の悲劇などどうでもよく、初めての童話集の出版のことだけが心配だといふところに、人間のギリギリの本性が露呈している。

新美南吉の病気が悪化して、分限免職の辞令を受け取つたのは十八年二月十日、それから一カ月余り後の三月二十二日、三十歳の若さでこの世を去つた。

新美南吉の安城高等女学校在職の五年間を思い起すと、最初の二年間は教師であつたが、三年目からの二年間は文学に目が向いていた。そして最期の一年間は自らの死との対峙であつた。この五年間は戦争の時代でもあつたが、彼は状況に順応こそすれ、時代に逆らう意志はむろんのこと、時代を見つめる余裕すらもなく、ひたすら少年時代からの夢だけを追つただけなのである。そういう南吉を戦争や体制への順逆の基準で評価することは無意味なことだろう。彼は当時の教師

として、あるいは一人の日本人として当然の振舞をしただけである。新美南吉は、田舎の女学校教師にしては文学的閱歴が立派すぎるし、文学的野心がありすぎた。文学的野心や名声欲が大きいのに、文学的、思想的体験はあまりにも貧しすぎた。そしてなによりも気の毒なことは、実像とかけ離れた評価が没後に定着してしまったことである。